

『我春集』から『株番』へ

黄色 瑞華

『株番』(一茶自筆稿本・美濃判三冊、湯本氏蔵)は、文化九年(一茶五十歳)の発句・連句・文章を収める。ただし、卷三には、文化十年、十一年の作品や記事も含まれている。^{注1}

文化八年十二月のはじめ、信州柏原の間屋本陣の中村桂国がこの年二度めの出府、同月十五日には帰っている。一茶は十九日に江戸を立ち、流山・馬橋を経て二十二日布川(現、茨城県北相馬郡利根町の内)に入って越年している。文化九年、この一年の一茶の動静を略記すれば次のごとくである。

一月 歳旦吟「春立や先人間の五十年」

15日 古田月船宅の「日待」に加わる。「おのれやれ今や五十の花の春」(『株番』の巻頭に収める)

23日 この日より二月十一日まで守谷の西林寺に滞在。鶴老と両吟歌仙四卷(「霞む日の」の巻、「鶯も」の巻、「松陰に」の巻、「弥陀仏も」の巻。いずれも『株番』に収める。)成就。

二月

12日 守谷を立て、流山へ赴く。途中、布施(現、千葉県柏市の内)の東海寺に参詣して、「鶏に米を与える」小文

を成す。

15日 江戸帰着。

17日 成美の随齋会（本所番場）に出る。

18日 谷中の本行寺に一瓢を訪ね二泊。

22日 馬橋（現、千葉県松戸市の内）へ赴く。

三月

1日 流山に入る。

3日 「翌は又どこぞの花の人ならん」（双樹）を立句とする両吟歌仙を成就。

9日 江戸帰着。松井宅（七泊）、本行寺（五泊）など転々とする。

28日 富津へ赴く。

四月

3日 織本花嬌の三回忌法会に出る。

4日 花嬌追善句会。「目覚しのぼたん芍薬でありしよな」「何をいふはりあひもなし芥子の花」（『株番』に収める）。

6日 「やがて死ぬけしきは見えす蟬の声」（はせを）を立句とした白老との脇起歌仙を成就。^{注2}

7日 「短夜の草に生れしとんぼ哉」（貞印）を立句とする貞印・一茶・とく阿・ユ雪（徳）による四吟歌仙成就（『株番』に収める）。

9日 大乘寺（住職は徳阿）の「ソバ切」に招かれて一泊。「みみつ貝」の小文を成す（『株番』に収める）。

27日 大乘寺に赴き、「朔日や裕もたねば蓑をきる」（雉啄）を立句とする雉啄・一茶・とく阿・貞印（徳）の四吟歌仙を

成就(『株番』に収める)。

五月 月末 富津「西蓮寺法印狂歌」の小文を成す(『株番』に収める)。

五月

3日 「花嬌家集并追善集」編集を終る。(『七番日記』に「花喬家集并追善集、五月十二日書始、今日終」)。

9日 前日、船で富津を立ち(船中一泊)、江戸帰着。

17日 成美の随齋会で一日百句を吐く(一部を『株番』に収める)。

21日 流山に赴き三泊。

六月

12日 江戸を立って信州柏原へ向かう。

18日 柏原着。滞在中は、主として、本陣・中村観国方に泊る。

七月

本陣八泊、古間四泊、長沼五泊、毛野四泊、柏原の小升屋五泊、二之倉一泊(『七番日記』七月の条)。

八月

12日 柏原を立って江戸へ向かう。

18日 江戸帰着。

19日 出府中の中村桂国発病、その看護に当たる。

27日 柏原より中村観国出府。

18日以降 「露はらりはらり大事の浮世かな」(一茶)を立句とする久臈(後の由誓)との両吟半歌仙成就。^{注3}

九月

2日 一峨の今日庵に赴き、「落馬した人の嘶も永き夜ぞ」(一作)を立句とする一作・一茶・一峨・素玩・草鳥との半歌仙成就(素玩撰『滑稽深大寺』所収)^{注4}。

23日 馬橋へ赴く。二十五、六日流出へかけ二十七日に帰る。

28日 布川へ赴く。月船宅に滞在して、相馬郡藤代で八歳の娘が出産した話を聞き小文を成す(『株番』に収める)。

十月

15日 江戸帰着。

26日 馬橋に赴く。

27日 双樹没(『七番日記』十月十三日の記事に「双樹病」とある)。二十九日の葬儀に参列。

30日 江戸帰着。

十一月

17日 柏原帰住を決意して江戸を立つ。「送帰旧里」と題した「碓氷では時雨よ杖は軽くとも」(一峨)、「吾妻のそらはみな小春なり」(一茶)の付合(『茶翁聯句集』所収)がある。ただし、丸山一彦氏は『時雨』『小春』とあるから十月中の唱和であろうとする。

24日 柏原着。丘右衛門の家を借りる。「是がまあつひの栖か雪五尺」成る。

十二月

15日 前月二十七日より古間・毛野・大倉・浅野・長沼などの門人宅を巡回して柏原に帰る。

24日 二十一日から野尻へ赴き、この日丘右衛門の借屋に帰って越年。

一茶は前年の文化八年に編んだ『我春集』の序文で、次のように述べた。

昔く清き泉のむくく^と涌出^る別荘を持ちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆^{おほひ}におほひを作^{つくり}て、倩^{つらつら}年月をへたりける程に、いつしか垣もくち、水もわろくなりて、茨・おどろ、おのがさまく^にしげりあひ、蛭・子^{ほり}子^{かり}とこころ得顔^をにおどりつ^つつひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。此道^{この}ころさずも又さの通り、よりく^と魂の僕^{かひ}を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼腐^かれ俳諧となりて、果は犬さえも喰^くらはずなりぬべき。されどおのれが水の嗅^臭きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆくく^と理屈地獄のくるしびまぬがれざらんとす。さるをなげきて、籠山^{こもりやま}の聖人手かしく此俳^{この}唄^{うた}をいとなみ、日夜そこにこそりて、おのく^と練出せる句く^との決断所とす。春の始より入来る人く^と、相かまへて、其場^{その}のがれの正月こと葉など、必ずのたまふまじもの也。

文化七年十二月 日

しなのく^と国乞食首領一茶書

「つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける」までは、どうしてみても俳壇の時流に乗ることができないでいる一茶の、いわば中央俳壇に対する批判であり、それを受けた「此道こゝろさずも又さの通り」以下には、何とかして一派の首領の地位を得たいとする意気込みがある。

文化七年の五月、抗争中の父の遺産問題が座礁、「取極一札之事」も反古同然となつて、ついに「古郷やよるもさ

はるも茨の花」と吐き捨てている。肩を落して江戸へもどった一茶には、家があるわけでも、家族があるわけでもなかった。まして、生活の基盤となるような資産などあるはずもなかった。

『我春集』の序文は、そういう窮地に立った一茶が、起死回生の願いをこめて、守谷を中心に下総一帯の俳士たちの鳩合を図ったものと見る事ができる。

三

「より／＼魂の僕を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさよれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰はずなりぬべき。」という一茶の主張に誤りはなかった。しかるに、彼が「魂の僕を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほ」さんとして、『我春集』に示した句風はいかなるものであったか。

着到帳第一番

我春も上々吉ぞ梅の花

節穴や我初空もうつくしき

米搗や臼に脇かけて梅の花

鶯の親子仕へる梅の花

けろりんくわんとして雁と柳哉

あさら井や猫と杓子と梅の花

うす壁やどちらの穴から春が来る

三ヶ月やふはりと梅に鶯が

我庵は蛙初手から老を鳴なぐ

赤馬の鼻で吹ふきけり雀子すずめの子

黒土の草履のうらも梅の花

春雨に大欠おきビスル美人哉

畠打や手涕をねぢる雨の花

花の月のとちんぶんかんのうき世哉

いずれも「魂の魄を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさざれば」と主張する一茶の、新しい俳諧とみてよからう。

それは、

梅さいて梅をらぬ日はなかりけり

士朗

釣のいとも香に匂ひけり梅の花

同

貫之の草のまくらぞうめの花

同

散うめはみな墨染の匂ひかな

同
(枇杷園句集)

舟曳や五人見事に梅を嗅

巢兆

梅散るやなにはの夜の道具市

同
(曾波可里)

さくと見てふた夜過しぬ梅の花

成美

うめが香を袂に入れてそら寝かな

同
(成美家集)

というような、都会人士の風流とは違った一茶独自の句風である。「散うめはみな墨染の匂ひかな」「舟曳や五人見事に梅を嗅」というような観念的・通俗的な句風に対して、「鶯の親子仕へる梅の花」「あさら井や猫と杓子と梅の花」と、それを批判的に見る一茶の姿勢は確かである。だが、「うめが香を袂に入れてそら寝かな」というような、洗練された都会的な句風は、一茶が長年求め続け、しかもそれを会得できずに終わったものでもあった。

「散うめはみな墨染の匂ひかな」というような空想的・観念的世界ではなく、「黒土の草履のうらも梅の花」というような、生活実感による作句に活路を見出そうとするところに、新しい俳諧のねらいがあった。だから、

手鼻かむ音さへ梅のさかり哉

芭蕉
(卯辰集)

では飽きたりなくて、

畠打や手涕をねぢる雨の花

にこそ「俳諧」があると、主張できたのである。また、洗練された都会的な句風にあこがれ、蕪村の、

燃え立ちて貌かほはづかしき蚊やり哉

(安永九
速句会草稿)

にならって、

蚊を焼くや紙燭にうつる妹が貞かほ

(寛政句帳)

のような句風をめざした習作時代もあったのだが、それも放棄して、「春雨に大欠ビスル美人哉」というような、独自の句風を積極的に詠もうとしたのであった。

このような傾向は、連句においても、その句作りや付筋によく現れている。

花の序に砂をいたゞく

鶴老

門守が寝言にかすみ引ぱりて

一茶

鶉の逃しけさがたの夢

老

名月の俵に萩をつゝさして

〔「走り行」の歌仙〕
茶

へら鷺に門かどのけしきを作りけり

鶴老

腹はらはいに寝タルはつ春

〔「草臥し」の歌仙〕
一茶

花を折ル心いく度もかはりけり

成美

ざく／＼汁の春の夕暮

一茶

鳥打がかすみの布子ぬき替かて

美

あらうつくしの橋はしのかけ様

茶

短夜の袴をぬらす地蔵講

美

欠^{あくび}法度と書て張る也

茶

笠程に湖見ゆる窓きりて

美

鼓うち／＼よばる旅人

茶

ほか／＼と壁の穴から花の春

茶

子^{ねのひ}日を老にくやむ針立

美

東風吹ばほまち無尽のはやる也

茶

(「花を折ル」の歌仙)

これらの題材・用語・付筋を鶴老や成美のそれと比較すれば、一茶調の特色がよくわかる。右に例示したような句風は、『我春集』に入つて、突然に現れたというものではない。寛政期の作品にもすでに、

逃込^{ゆふだち}で白雨ほめるおのこ哉^(を)

馬の屁^へに目覚て見れば飛ほたる

船頭よ小便無用浪の月

(寛政句帳)

というようなものが見える。また、

青すだれ白衣の美人通ふ見ゆ

散ぼたん昨日の雨「を」こぼす哉

しづかさや湖水の底の雲のみね

(寛政句帳)

といような句も見える。前者は、俳人として一茶が育った葛飾派の一傾向でもあり、一茶自身の句法でもある。後者は、一茶があこがれ、模倣・習作を重ねた蕪村に代表される天明調の句法である。^{注5}

四

抗争中の父の遺産問題が暗礁に乗りあげ、柏原帰住のめども立たず、祇兵を催主とした月並句会も思うように運ばない。そんな状況下で、一茶は起死回生の願いを込めて、『我春集』の序文を書いたものと思われる。

一茶は、観念的・通俗的な俳諧を批判し、生活実感を重んじた新しい俳諧を主張し、みずからそれを積極的に実践しようとした。具体的には、「黒土や草履のうらも梅の花」「春雨に大欠ビスル美人哉」というような句を積極的に詠んでいこうということだった。そう決意した一茶は、「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のとちんぶんかんのうき世哉」と、それまでの作句姿勢を自嘲する。

自身の詩に忠実に生きようという決意は誤りではなかった。また、それを積極的に詠もうとする姿勢も誤りではなかった。だが、そこに具体的に示された句風は、初期の句帳から不連続線状に続く、いわゆる一茶調そのものであった。したがって、「より／＼魂の魄を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさぶれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰はずなりぬべき。」という『我春集』の序文は、自身の俳風に対する擁護の弁でしかありえないことになる。「野中のむもれ井」にたとえた時代の俳風に対する批難は、自身の上に返ってくることになる。長年ひそかにあこがれ、模倣・習作を重ねてきた都会的な俳風への志向をきっぱりと捨て、自からの生活実感に基

づいた作句を提唱する一茶ではあるが、作品の上からすると、相変わらずの俚俗的・田舎風とも称すべきものであった。その発想や題材の取り方において、用語や季語の働かせ方において、それまでのいわゆる一茶調を出るものではなかった。したがって中央俳壇においては言うに及ばず、一茶自身の周辺においても、従前に対比すべき変化はなかった。

『七番日記』の文化八年の条を見ても、成美や一瓢との交渉は続いていたものの、中央俳壇とのかかわりはなく、両誌の知人間を巡って口を糊するというのが実状であったと思われる。

五

文化八年十二月十九日、一茶は流山に赴く。同月二十一日馬橋、二十二日布川に入ってそのまま越年している。宿泊は同地の回船問屋で一茶の俳友であり、後援者でもあった古田（五水庵）月船宅であろう。また、歳旦吟は「春立や先人間の五十年」「おのれやれ今や五十の花の春」（七番日記）であった。『七番日記』の文化九年一月の条には、

ジャ／＼馬のつくねんとしてかすむ也

一並雁の欠ビやうすがすみ

かゝる世に何をほだへてなく蛙

春の風足むく方へいざさらば

どち向も万吉とやなく蛙

などと見え、『我春集』所収句に比して変化はない。

三月二十七日、船で江戸を立ち翌二十八日富津へ入った。この旅の目的は二つあった。一つは富津の名主・織本嘉左衛門の未亡人・花嬌の三回忌法要に列席することであり、もう一つはその「家集」を編むことであつた。

『七番日記』四月の条には、「三晴 花喬(橋)仏三回忌」「四晴 北風吹。未刻ヨリ雨、終夜不止。花喬追善会」とある。また、五月の条には、「三晴 花喬家集并追善集 五月十二日書始、今日終」と見える。「五月十二日書始」とあるが、これは「四月十二日」の誤りであろう。花嬌三回忌法要の翌日には追善の句会を催し、九日には大乘寺の徳阿(注6)の「ソバ切」に招かれて一泊し、織本家には十日に帰っている。

五月三日『花嬌家集並追善集』の編集を終えた一茶は、同月八日未の刻に船に乗り、船中一泊して九日には江戸(松井宅)へ帰っている。『七番日記』同月の条には、

初雁に旅の寝やうをお(を)そはらん
いざいなん江戸は涼みもむづかしき

がある。「初雁に」の句は富津滞在中の作品、「いざいなん」の句は江戸帰着後の作品である。一茶が花嬌に対する力の入れようには並々ならぬものがあり、これは諸家の指摘されるとおりである。また、織本家の当主・養嗣子の子盛もよく一茶を遇したようだし、近くには徳阿や砂明もいたのだが、長期の滞在中には気まずい思いをすることもあつたのだろう。そうした中で、とにもかくにも『花嬌家集并追善集』の撰を至上目標として耐え抜いたものであろう。目的を達した一茶は五日後の五月八日には富津を立っている。

五月九日、江戸へもどった一茶は松井宅へ入り、十二日からは一瓢の本行寺へ、十五日からは成美のもとにあつたが、十八日はまた馬橋・流山に赴いている。「いざいなん」の句はこのころの成立とみてよからう。

「いざいなん江戸は涼みもむづかしき」の「いなん」は、馬橋や流山をさすのではなく、それが故郷柏原をさすこととは言うまでもない。すなわち、この句は柏原帰住の最終的決断を示すものと見るので妥当である。そして、その決断は富津滞在中にほぼかたまっていたものとみたい。さらに、『株番』の序文執筆の時期もこのあたりと推定したい。

文化九年正月十五日、下総国相馬郡布川の郷なる月船亭の日待といふことをして、人々こそりて夜の明るをなんまちける。折からさる生かしこき人のいふ、「ことしのいなり祭りは丙午といふにて、大火地火(注7)にあたり。六十年に一度の大凶日なれば、其日その地より火起りて、其けぶり大きくなりて、其災野辺の駒に及ぶおそろしき日也。つしむべしと事触ことかれが告つげたりし」とかたりぬ。又、陽の方より、白雪の土に汚れしやうなるかしらつきして、おこづきたる叟のやをらよろほひ出ていふやう、「雲をつかむやうなる根なしごとを、ゆめく誠とし給ふな。それは事触等もがそらよみと覚ゆ。大火には侍らじ、天火なるべし。ことしの初午は天地ことの外あたゝかになりて、かすみかくれの桃柳、おのがさまく色をあらそひ、其たのしび野辺の春駒におよぼし、夢に見てさへよいけしきぞよ。我くごとき老かゞまりたる身も、めでたき時にながらへて、うどんげの花まつやうに、今からたのもしく思ふ也。そこ達も火用心ひのうはしかるべし。さらにおそれはあらじ」といふに、主手あてばやく曆投げ出して、「是見これられよ」といふ。叟目じるふきくいく度もすかし見るに、ししかいふごとく大火也。しばらく小首かたぶけていふやう、「昔長頭丸の句に、『螢もや曆にはなき天火地火』とこそつゞけ。是はいせんのひがもじなめり。かくては上下とよのはず」とこよみを畳めば、人く同じ声に、「まさしく栗の花が咲いても末はならの木としひ誣言ごとのみないひそ。上ミ万乗の君より下乞食にいたる迄まで天下規矩のきくとするもの、露おろかやあらん。ましてそなたのやうに衣のきたなげなるものゝ及ぶ事にやは」ときやらくと笑ひ、かうくとのゝしりあへり。

程なく来見寺の鐘暁をつげて、布佐台の鳥かはくくと鳴わたるに、おのくばらく帰りけり、是万人の定たる大火によらんや、一人の極たる天火にしたがはんや。思ふにふたつながら非なるべし。前の日しかくの事あれば、必かならずあらんと思ひこみて、空しき株くびかせを守る輩にぞありける。

されば我らがたま／＼練出せる発句といふものも、みづから新しきとほこれば、人は古しとあざける。ふたよびよく／＼見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほと／＼おのが心にもうんじ果て、三日ばかりも口を閉れば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よし／＼汝はなんぢをせよ、我はもとの株番。

おのれやれ今や五十の花の春

一茶

(株番の序)

正月十五日、月船宅における「日待」について、『七番日記』にそれ当たる記事はない。ただし、『株番』には、「おのれやれ」の句に続けて『七番日記』同月の条に見える「かゝる世を何をほだへて鳴蛙」や「行がけの駄ちんになくや天つ雁」「山鳥おれかつぎ木を笑ふ哉」の再案「行がけの駄ちんに鳴やけさの雁」「山鳥おれがさし木を笑ふ哉」などが収めてある。

賢者ぶつた男が、「今年の初午(二月三日)は、丙午に当たっており、しかも大火地火に当たる。それは六十年に一度の大凶日で、その日は地から火が起こり、煙は大きく燃え広がって、その災は野辺の馬にまで及ぶという。だからつっしまなければならぬと、鹿島の事触が告げていった」と言う。これを聞いていた老人が、「それは事触れのあてずっぽうだろう。大火は天火のまちがいで、今年の初午はことのほか暖かだ……火の用心はなさるがよいが、それさえ気をつければ、何の心配もなからう」と言う。主人が持ち出してきた暦を見ると確かに「大火地火」とある。それを見た老人は「昔、長頭丸(松永貞徳)の句に『螢もや暦にはなき天火地火』というのがある……」とやり返した。人々は口をそろえて「真正正銘」の栗の花が咲いても、木は櫓の木というたぐいの僻言を言うな。伊勢の暦は上は万

乗の君から下は乞食にいたるまで、こぞって規矩となすものだ。何の誤りがあるろう。まして、そのたのようなみすばらしいなりをした者の知ったことではない」といって大笑いした。

この話を受けた形で、一茶は「万人の定めた大火の説によったものだろうか、それとも一人が決めた天火の説に従ったものだろうか。思うに双方とも正しいとは言われまい。前日にしかじかのことがあったから、今日も必ずあるだろうと思ひ込んで、空しく株を守るたぐいであろう」と述べる。

伊勢の曆にあるから間違いない、というのは観念である。一茶は前年の『我春集』序で、それを「茨・おどろおのがさま／＼にしげりあひ、蛭、子子とこころ得顔におどりつつ」と批判した。そして、「より／＼魂の僕を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさ」と、新しい俳諧を提唱した。ところが、それが時の俳壇に影響を与えるどころか、守谷界限の俳人を鳩合することさえむずかしかった。それは「そなたのやうに衣のきたなげなるものゝ及ぶ事にやは」とみるからにほかならないと一茶は考えるのである。

一茶は自身の俳諧をふりかえり、「されば、我らがたまたま練出した発句というものも、自から新しいと誇れば、他人は古いと言って嘲る。再度よくよく見直してみると、他人が指摘するようにいかにも古く、ほとほと自分の無能に倦きはててしまふ」とした上で、「よし／＼汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」と言い切る。これは、一種の開き直りと言ってよからう。追いつめられた者の正面切った物腰と言ってもよからう。

これまで、「よし／＼汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」を「守株の愚を悟り、それに徹しようとする」と解するのが一般的で、私自身もそうしてきた。^(注8)だが、それは自からの「愚を悟る」というようなものではなく、開き直つて、それをさらに押しすすめようとすることだったように思われる。それでなければ、この直後における父の遺産分配交渉にかかわる動きが解しにくくなるからである。

一茶はこの年、元夢の十三回忌に当たり、一峨が今日庵再興の記念集『なにぶくろ』（同年初秋の刊記がある）の序文を書いている。元夢は葛飾蕉門の祖・山口素堂の今日庵を嗣号して二世今日庵を名乗り、『俳道系譜』（露柱庵政二説、思無邪園亀卜編）によれば、一茶はその門下である。また玄阿撰の『はい柳の友』（寛政元年刊）には、「振り替る柳の色や雨あがり今日庵執筆 菊明」とある。

その一茶が、その記念集に序文を寄せるのは当然のことではあった。一茶はその中で、「やがて再建の講頭かうがしらとなりて、ともく乙鳥の土をはこび、木つゝきの穴ほりて、一簣の力をあはすものなり」と、その講頭をさえ自称している。『葛飾蕉門分脈系図』（馬場錦江編、嘉永末年成）には、元夢没後「少時嗣号の事なかりしが、文化の頃今日庵一峨と称するものあり。白芹翁（注、葛飾派五世）より尋られしに自称也。一峨いはく、今かつしか今日庵と称するゆへ、世に用ひられて、頗る世業の助となれり。かまへて正風の文台にあらざれば、知らざる分にして玉はらば、幸ひ甚しからむ。もし葛門下に今日庵を号する人あらんには、速に罷玉ふべしと乞ふにより、彼も葛門をしたへばこそ、しかなれとて、その望みにまかせおかれし」とある。そして、この「分脈系図」の一茶の項に、「文化年中一派の規矩を過つによりて、白芹翁永く風交絶す」とあるのは、一峨に荷担しその講頭を自称したことをさすものと考えてよろう。

推量の域は出ないが、『なにぶくろ』の上梓は文化九年初秋であるから、一茶の序文はそれ以前に書かれたものであり、そのことは上梓前に葛飾派内に知れ渡っていたのではなからうか。『七番日記』五月の条の「いざいなん江戸は涼みもむずかしき」にははそうした背景もあつたと見たいのである。そうすると、『なにぶくろ』の序文執筆は「いざいなん」の句成立以前と考えられ、それも花嬌の三回忌法要のために富津へ赴いた三月下旬前後と考えてよか

ろう。

一茶は一峨の今日庵自称を承知していたはずである。それを承知の上で、このような文を成したのは、元夢に対する恩誼に報いるためだけだったとは考えられない。万事につけて計算高い一茶が、恩誼のために我が身をかえりみず、一峨に荷担するなどということは考えられないのである。この一件にも、追いつめられた一茶が、起死回生を願った大博奕があったと見るのは無理な推量であろうか。

七

一茶が『株番』の序で、「よし／＼汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」と言い切った背景には以上のごとき事情もあったと考えられる。「お前たちはお前たちの勝手にせよ。おれはおれで自分の道を行く。」そう聞き直った一茶は、六月十二日江戸を立て信州柏原へ向かう。もちろん、父の遺産分配の交渉が目的であった。十二日上尾泊、十三日深谷、十四日松井田、十五日田中、十六日戸倉、十七日善光寺に泊って、十八日に柏原へ入った。

柏原へ入った一茶は生家に泊まらず、本陣（中村桂園）に二泊して旅の疲れを癒し、二十日には隣村古間の小林雲居（醸造業）をたずね、二十一日には実母の里・二之倉の宮沢徳左衛門を訪ねた。この間に父の遺産分配要求についての策が講じられたことは相像に難くない。そして、異母弟仙六との間に具体的交渉のあったのは、二十四、五日になってからだった。

八月十二日、今回の交渉を打ち切って柏原を立つまでの間、その交渉は執拗に続けられたものと考えてよからう。父没後から文化四年までの叔代（一茶分の収益）に併せて、文化九年までの家賃（二分の一は一茶分）を含めて、三十両の支払いを求めるといふものだから、交渉は思うように運ばない。『七番日記』七月の条には、

我星はどこ「に」どうして天の川

貧乏をさあ御覽ぜよ仏達

連のない生霊あらんしなの山

と、亡父母や祖母に庇護を請い、

とぼく^(わ)と足よは雁の一つ哉

と、自己の孤独を影を見つめている。

一度江戸へ帰った一茶は、強力な後援者、秋元双樹（流山、白味酩の醸造業）の逝去に会う。また、前述の『なにぶくろ』の序文にかかわる一件も、このころには問題化していたはずである。

十一月十九日、一茶は追われるようにして最後の交渉の途に着いた。

送帰旧里

碓氷では時雨よ杖に軽くとも

一岷

吾妻のそらはみな小春なり

一茶
(一茶翁聯句集)

の付合から、両者の境涯や心情を読みとることができよう。

〈注〉

- 1 例えば、「世につれて花火の玉の大ききよ」（一茶）を立句とする鶴老との両吟歌仙が収めてある。「世につれて」の発句は『七番日記』文化十一年七月の条に中七以下「花火の玉も大きいぞ」と見え、翌月（十八日から二十七日まで）守谷滞在中に催した両吟と考えられる。また、「文化十年十一月四日出、正月廿九日とづく」として、「十夜／酒売の十声ひと声たのみ有」「世をうんじ果たるころ／此上に櫛もたてよ厚衾」と成美の二句を収めている。ただし、文化十年十一月には「閨」があつて、受信までに時間的疑問が残り、『七番日記』にもこれに当たる記事はない。
- 2 信濃毎日版「一茶全集」の年譜では、この脇起歌仙と、雉啄らとの四吟歌仙の成就を三月に混入している。
- 3 この半歌仙『茶翁聯句集』『成美連句録』に見え、後者に「文化十年八月」とある。『七番日記』によれば、一茶は文化十年八月、善光寺の桂好亭で病臥中であつた。「露はらり」の発句は、『七番日記』文化九年八月の条にあるから、同月十八日江戸帰着後の成就と見るのが妥当である。
- 4 一茶全集（前出）の年譜では欠落。
- 5 蕪村に「椿落ちて昨日の雨をこぼしけり」（蕪村遺稿）、霞東に「しづかさや湖水にうつる雲の峰」（続明鳥）がある。
- 6 『七番日記』四月の条には、「四日花喬（嬌）仏」と題した「日覚しのぼたん芍薬でありしよな」「何をいふはりあひもなし芥子の花」「夕立やけろりと立（たち）し女郎花」がある。
- 7 伊藤正雄『注解一茶文集』の注に、「文化九年の伊勢暦を見るに、二月三日が初午で丙午に当っており、暦の下段に『神よし、大みやう、大火地火』とある」。
- 8 拙著『小林一茶』（日本の作家34）一八八Pなど。